



「現場で磨いてきたイノシシ対策は僕らの強み。ゴールは担い手育成と地域の活性化です。」と話す宮川さん。

農家ハンターは市内だけでなく県内の高校や大学、困っている地域へ出向き、地域課題としての獣害対策の大切さを訴える。

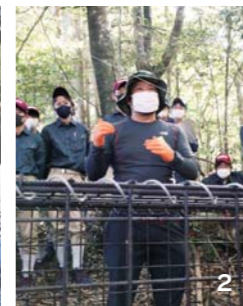
生きた言葉を届ける

10月6日、彼らは芦北町の鏡山にいた。ここは芦北高校の演習林。生徒がシカやイノシシの捕獲技術を実習で習得する場。この地域でも鳥獣被害は深刻化しており、シカの食害やイノシシによる土の掘り起こしは後を絶たないという。

生きた指導で輝く未来を切り拓く

子どもたちや農村、地域の未来のために若き担い手を育成。

1 箱わなを仕上げる 2・3 懸命に鳥獣害対策の今伝える 4 呼応するような熱いまなざしを送る生徒たち 5 演習林内の被害をデータに 6 箱わなを組み立てる 7 野外の学びの場 8 記念撮影は笑顔で©イノシシピース



芦北高校教諭の前島和也さんが「演習林内に8年前に植えた50本の梅檀の木も今ではたったの1本。被害が深刻化し始めたのは2年前から。このままでは農業や林業ができなくなる。」そう生徒たちに訴えかけ授業は始まった。

稲葉さんは対策の第一線で活躍する傍ら、農林水産省の農作物野生鳥獣被害対策アドバイザーなどの資格を持つ。箱わなの管理や捕獲に携わるリーダーとして現場で培った技術は研修でも生きる。

「シカのこと勉強し始めたのはね、被害を聞き調べたらすぐに対応せなと思ったから。今まで生息してないと思われ

ていた三角町でシカを見てしまったとよ。イノシシの時にも『誰がここに穴掘った?』てみんな言いよって、イノシシからのサインを見逃してしまつたと。被害が出て、『やおいかん』て言い出した時には手遅れで、人間と動物とのバランスはすでに崩れとる。絶対に見逃してはいけない。」

対策への思いや経験してきたこと、地域の声を伝えていく。「ばらばらに捕ってはだめ。自分の畑に現れなくなっても、隣の畑を荒らすだけ。山に防衛ラインを引くことが大事でここに置いて頼まれても民家の近くには置かない。10歳、20歳でも山の中へ入れてほしかね。

「餌ここにあるよ」という合図になってかえって危険にさらされてしまう。地域の人たちと戦略的に考え、話し合い、守りながら捕獲してきたからこそ、三角町の被害は減ってきたと。」

「新しい技術も効果的に使うこと。データを取り、出現場所を正しく予想できるようにすれば、対策の仕方も見えてくる。一緒に箱わなを組み立てて、カメラを設置しよう。」

培った技術だけでなく、駆除に取り組み続けたことで生まれた信頼関係や協力体制を生徒たちへつないでいく。

以前は無かった鳥獣被害が全国で拡大していること。シカやカモによる新たな被害。危機感

を持つことや近付けさせないことなども一つ一つ丁寧に伝えていった。

林業職の公務員を目指す2年生の出田祐輝さん(小川町)は、「命の大切さを実感しました。人間の都合だけだと、対策しなければ林業や農業は守れない。特に、『頂いた命は活用していかなければならない』という言葉が強く心に残りました。学んだことを今後に生かしたい。」と学びを振り返った。

地域のために最前線に立って汗を流し、地域と共に歩んできたからこそ、生きた言葉は生徒たちの心に響く。

そして、若き担い手へと受け継がれ、広がっていく。



地域の未来は みんなで守る ——。

